

在園児のおかげです！！

ふぞく新聞

4月22日(金)

Vol. 1
(Vol.43)

ふぞく幼稚園の十七年度が始まりました。今年度は在園児二十五名、新入園児名三十七名の計六十二名と共に色々なことをして遊んだり、考えたり、発見していききたいと思っています。そんな入園式後の出来事です。廊下で一人の女の子とすれ違いました。『おはよう』と声を掛けると、目をそらして、僕との距離をおくのです。他にも僕が上靴を履いて中に入ろうとする姿をみて(本当はその子も上靴を取りに来たのに)全く関係ない所に歩いていくのです。初めての集団生活です。男の人が苦手な子もいて当然です。そこで強引に「ねえ！」と声を掛けて振り向かせることはしません。そんな時こそ今まで通り在園児と話し、遊ぶのです。

上段の続きを、そんな時在園児の多くは「ねえ、サル先生！」とわざと僕に声を掛けてきます。『ふぞく新聞』と僕のリ

アクションを見て大笑いしています。するとその笑い声中に先程の女の子の笑い声も聞こえるではありませんか。

ちゃんと見ているし、聞いているのです。そのうち女の子が自ら僕に声を掛けてくる日も近そうです。

こんな場面では自分の保育者としての無力さを感じつつも、在園児に助けてもらって何とかやっていけることにとても感謝し、また嬉しく思っています。先生、一人の力等知れているのです。

在園児の成長が、ある意味幼稚園の土台を築いている(強固にしている)と僕は思っています。本当に頼りになるのです。

独り言

今年度も『ふぞく新聞』を書かせて頂きます。

『ふぞく新聞』って何？と思われる方、それは生意気な幼稚園教諭が子ども達と遊んで、過ごさせてもらい感じたことを、思うがままに書いたものです。

なんでそのような手紙を出しているのかといいますが、それはふぞく幼稚園が遊びを応援する幼稚園だからです。

応援にも色々ありますが、この『ふぞく新聞』を通して子ども達の気持ち・言い分・心等々を伝えていきたいと思っています。勿論これらが全て正しいわけではありません。ほんの少しでもいいので頭の片隅にという願いもあります。

柿原 勝

ふぞく新聞

5月20日(金)

Vol. 2
(Vol.44)

約束も勿論大事ですが・・・

長い休みが終わり、幼稚園に元気な声に戻って来ました。その初日は、**ねえ先生、僕は〇〇に行ってきたよ**」動物園にいったら△△ちゃんにあつたよ」**せんせいー！・・・私ね・・・**と次から次に話し掛けてきます。そのうちちょっと待っててね。順番だから」と声を掛けていくとたくさん待っていた子がいつの間にかいなくなってしまうしました。

きつと子ども達の心の中では、先生に休み中楽しかったことをすぐに報告したかったに違いありません。でも順番を待つてまで報告する程ではなく、友達との再会や久しぶりの遊具で遊ぶほうが魅力的だったようです。

ちゃんと聞いてあげたいと思ったから一人ずつ順番にしたのに、結果は逆の方向へ・・・。

上段の話ですが、**え、それじゃあ約束は必要なのですか？」**だって守らなくちゃいけないですよね」と思われる方、ごもつともです。

ただ子ども達の世界では、全てが全て、約束が先ではないように思うのです。

まだ約束を自分達でつくっていく、考えていく過程にあるのです。自分達で納得して決めた約束ならともかく、大人の都合で勝手に決めたことに対しては比較的？」といった反応を見せるのはそのためでしょう。

形式から入ることも大事です。そして必要です。それがあるから成り立っていることも多々あります。ただそれが全てではないことを『翼の片隅に』と思うのです。そんな中面白いのは数日後、突然思い出したかのように休み中の出来事を教えてくれる子ども達がたくさんいることです。

独り言

実は子ども達って人の話をよく聞いているのです。

しかも自分にとつて(都合の)良いことには敏感です。まさに感度の高いアンテナです。

園長先生が集会の時に全園児に挨拶について『話を始めました。

朝はなんていうの？」と聞くと年中少さんの子ども達は自信満々に「おはよう」と答えています。しかし、年長の子ども達はふざけて「ぎょうなら」等と言っていました。(簡単な質問だったということです)

その後質問が続き最後の方に「これは難しいよ。わかるかなあ？」と前置きした瞬間、年長児の目が輝きすぐに答えています。聞いていた僕んだ」と見ていた僕でした。 柿原勝

ふぞく新聞

6月3日(金)

Vol. 3
(Vol.45)

小動物との出会いから

ある日、ふぞく幼稚園の園庭で遊んでいた女の子が**先生、鳥が死んでる!**と言ってやってきました。原因は分かりませんが確かに固くなって死んでいました。

そこに子ども達が集まってきて、色々と話した後、**お墓を作ろう**という話になり、シャベルで僕が穴を掘っていると**わたしもする**「**ぼくもやりたい**」と言って子ども用のスコップで掘り始める子、**お花とってくる**と言って走っていく子、短大の先生の何の鳥だろう?」の声に反応して図鑑を取りに部屋に走る子、棒を持ってきて**お墓に立てるの**と見ている子と様々な姿を見せる子ども達。この間僕は、〇〇して」等ほとんど指示はしていません。自分なりに考えて行動しているのです。出来るのです。

その鳥の種類は正確にはわかりませんが、あかはら」に似ているなあという話でおわかりました。

全てが全てそうだとは言いませんが、子ども達にとってこのような場面では正確さはそれほど重要ではなく、みんなで色々と考え合ったことや話し合ったことの方が大事だと思います。

さて、上段の話には続きがあつて、それから数日後、雛鳥が幼稚園の柵の所に3羽いたのです。(2羽は既に死んでいました)その姿を見たある園児が「この間のお母さんの子だね」「緒のお墓にいれてあげようよ」と言うのです。『そうかもね』と言って埋めました。何とか生きている雛鳥が口を開けました。すると「あー」と真似して口を開けている子がいました。小動物から何かを感じているのは間違いありません。

独り言

絵本と紙芝居の時間を大切にして
いるふぞく幼稚園
で、今、年長さんに
人気がある作品が
「ロボットカミイ」と
いう紙芝居(童心
社)です。(絵本
音館書店)も個人
的にはとても好き
ですが……

カミイが勝手な
ことをしたりする
場面では**だめだ**
よ」と口にする子
もいます。でもカ
ミイがそれなりに
正当なことを言う
と「うーん」と納得
している子もいま
す。

この作品の主人公
であるロボットは
普段子ども達が思
ついてもなかなか
言えない気持ち
をストレートに言
きるところに人
気があるように思
います。皆さんも
非一度ご覧下さ
い。子ども達の気
持ちは垣間見え
ますよ。 柿原 勝

ふぞく新聞

6月17日(金)

Vol. 4
(Vol.46)

成長過程がよーくわかる！！

ふぞく幼稚園はこの時期に運動会の練習が始まります。人生で初めての運動会に参加する年中少さんの姿と昨年度の経験がある年中長さんの姿を見ていて、どうそう、初めての時はこうだったなあ」と妙に懐かしく思う僕です。

今年のリレーの練習では、追いかけてくるお友達を待っている子もいれば、ぶつかって転んだ相手に立ち止まり「ごめんなさい！」と深々と頭を下げて謝っている子もいました。勿論逆走、斜め横断(近道)なんて当たり前です。

「え、大丈夫？」と心配される方もいると思いますが、そういうものです。逆にそのような姿をよーく覚えておいて欲しいと思うのです。

すると翌年の運動会で「すごい」と更に感動するのは間違いなしです。

昨年度年少さんだった子ども達にとって今回の運動会は二回目です。その子ども達も行進や競技の入場の姿を見ていて「昨年自分からなかなか歩こうとはしなかったのに・・・」と嬉しく思いながら見ていました。雪たり前じゃないですか、入場ぐらい簡単じゃないですか」という考えもあるかも

しれませんが、僕は決してそうは思いません。雪たり前』に落とし穴があるとさえ思っています。

わかり易く言うと、昨年の行進や競技の入場は何となく担任に言われて、乗せられて行っていました。今年度は自分で少し考えて行っているのです。でもまだまだ確信はなく不安定な面があるので失敗もありま

独り言

年長さんになると勝ち負けにとってもこだわらなくなりですね。(全員がそうだとはいえませんが)

かけっこで負けたリ、リレーで負けたリした後の表情はいつもとは全く違います。

悔しくて、悔しくて、そこで大泣きしても練習の過程から、みんなに慰めてもらえない事もわかっていて「ぐっ」と口をつぐって我慢している姿はいじらしいです。

確かに負け続けるという自信を失うというのとは分かりますが、僕は『負ける』という経験はとても大事だと思っています。この悔しい気持ちをばねにしていけるような声掛けをするのが親・保育者の役目と思っています。 柿原 勝

ふぞく新聞

7月1日(金)

Vol. 5
(Vol.47)

大人の力を借りないで、 自分達だけでするの！したいの！

ふぞく幼稚園には色々な飼育物がいます。その中には金魚やおたまじやくしもいます。年長さんになるとお当番さんがその金魚の水槽を水飲み場まで運び(大人の足で約十二歩)金魚を網ですくってバケツに移し、その後水槽を洗って金魚を戻し部屋まで運びます。

「この姿を年中少さんはとても羨ましそうに何してるの?」と聞いてきます。すると年長さんは「これはきりんさんだから」と意味不明の返答をします。これには理由があつて、ふぞく幼稚園では金魚の水槽を洗うのは年長さんのみと数年前からしたのです。つまり、待ちに待った年長さんの特権の作業というわけです。だから **金魚の水を取り替えてるの**」という答えよりも先に変な返答をするのです。

さて、上記のお当番さんの仕事を4月から行っている年長さん。初めての頃は **先生！重い！手伝って！**と「こちらが何も言わなくても呼びに来ます。でもこの時期になると変化が見られるようになってきます。先生は持たなくていいの！」 **自分達で出来るから!**と言うようになってきます。見てみるとそれはそれには不安定であの・・・、水が波をうって床にたくさんこぼれているのだけど・・・」うわあ、ズボンに水がかかっている!」という感じですが。でもここが一番のポイント(大人が我慢して見守る)だと思います。やる気になったのです。自分達でなんとかしてみよう、やってみようと思ったのです。濡れたって拭けばいいのです。それ以上に大切なことがここにはあるのです。大人に力を全く借りないで出来た時の表情は最高です!

独り言

上段の話の補足をここでもしたいと思います。

この時に、水槽を少しでも僕が持つてはダメなのです。ほんの少しでも大人に手伝ってもらっては価値が半減します。自分達(子ども)だけの力で全部出来た時に最高の表情を見せるのです。

勿論、この段階までくるとは何度も子ども達と相談しました。「無茶はしない」「どうしても重たくてだめな時は助けを呼ぶ」「何故なら水槽を落としたら金魚が弱ってしまうかもしれないから、下手したら踏まれて死んじゃうかもしれないからです。失敗は成功のもと」の精神で見守ることがとても大切だと思っています。

柿原 勝

ふぞく新聞

7月15日(金)

Vol. 6
(Vol.48)

運動会がおわっても！！

運動会が無事終わりました。行進、体操、かけっこ、玉入れ、綱引き、お遊戯、リレー等々あらゆるところで成長した姿をみせた子ども達。つい最近まで「お母さんにあいたい」と泣いていたのに……と思いました。

当日の姿も好きですが、その後のふぞくの子どもの姿がもつと好きです。運動会後も先生、ガガンバー（体操の曲）かけて」とステージ上に並び、楽しそうに体操を踊っている姿。

年少さんも交ざって幼稚園の園庭をグルグルとエンドレスに走るリレー遊び。

年長さんの姿に刺激されたのか縄跳びを跳びはじめる年中少さん。勿論年長さんも更に上を目指して取り組む姿。

このような姿に、行事の重みを感じます。

運動会後の自由遊びの一場面です。その時の子ども達のやりとりを近くで聞いていて面白いなあと思ったので紹介します。

何する？」と年長さんの数人が話し合っています。女の子の一人（リレーで大活躍した白組の子）が「ワレー」と言うといいねえ。じゃあバトンとって来る」という子（勝った赤組の子）に対してえ、もうリレーはいやだよ」警察ごっこ、やっぱり忍者ごっこ」という子（白組の子）え、サッカーしようよ（白組の子）サッカーいいね！（サッカー好きな赤組の男の子）うんサッカーしよう。今度は勝つぞ（この今度は去年わかくさ保育園に負けたことではなく、運動会で赤組に負けたことを言っていたのがおもしろい）エイエイオー（白組の子）とサッカーが始ったのです。妙に頼もしく思えた姿でした。

独り言

ふぞく幼稚園にはうさぎがいます。釧路動物園から借りているのです。

すくすく育ち、体が丈夫になってきたので幼稚園の園庭に生えているタンポポやクローバーの草を食べさせても良い時期が来ました。待ちに待った時期がきたのです。子ども達はうさぎに「○○えさだぞ！」と嬉しそうに上げています。

その時えさを取り合っている二羽のうさぎがいました。そのうさぎに「ちゃんと仲良く分けるんだぞ」と声を掛けている子に「え？」と思いました。だってその子はよくおもちゃを取り合っているに注意されているからです。うさぎパワーは凄い！

柿原 勝

ふぞく新聞

9月5日(月)

Vol. 7
(Vol.49)

まさに十人十色！！

この時期、『ふぞく祭』(父母会主催)という行事があります。その時の子ども達の様子を見ていてまさに十人十色！と感じました。

スタンプラリーといって先生や父母の方がキャラクターのボードを背中にしよって歩いているのを見つけ、スタンプを押してもらうゲームがあります。開始後すぐに五つのキャラクターを見つけ、景品と取り替えている子もいれば、もうすぐ『ふぞく祭終了です』という直前にあ、こんなところにいたんだあ！と喜んでいる子もいます。

どんどん買い物をして **もう券がない** と言っている子もいれば、買い物をせず、小麦粉粘土をずっと楽しんでいる子もいました。

どちらも個性豊かでどちらも良いですね！

色々な経験を通して色々なことを身につけた大人の目線で物事を考えると、売り切れる前に欲しい品物を買う』というのは当然なことでしょう。又、お金を先に支払っている前売券を使わずに終わるなんて『でもない』ことでしょう。

さて、子ども達はどのようなのでしょうか？

確かにアドバイスも必要でしょう。教えることも大事でしょう。でも子ども達にとって一番大切なことは、自分のしたいようにしてみ、**実感する**『体験する』ことだと考えます。

上手いかないのも、損をしてしまうのも、大きな視野で見るととても大切なことだと、子ども達を日々見ていて感じます。

実感した後に、体験した後に大人のアドバイスをするのが子ども達には分かりやすい(伝わりやすい)順序かと思います。

独り言

園外保育で、ある公園に遊びに行った時の事です。

大きな滑り台を反対から登って数人で遊んでいると一人の年長さんが**先生、手を使わないで登れた**と嬉しそうに見せてくれました。他の年長さんもするのですが、なかなか上手くはいきません。途中で滑ってしまいうか、手を使わずには登れません。

そこへ近所の一年生が来て(土曜日なので)チャレンジすると一回目は失敗しました。するとその一年生は迷わず裸足になって登ったのです。その姿を見た他の園児も真似して登り始めました。すると次々に**出来た**の声。この間、大人は何も言っていない。自然で、とても良い空間でした。

柿原 勝

ふぞく新聞

9月16日(金)

Vol. 8
(Vol.50)

自然と伝わる遊び方

二学期になると遊びが確実に広がっていることを子ども達から教わります。

その広がり方も様々で、遊びの種類がまず増えます。『石けんアワアワ遊び』・『花から作る色水遊び』・『パッタ捕り』等々。

次に遊びが進化します。(ルールが複雑化した、技術が高度になってきます)『サッカー』・『鬼ごっこ(ラーメン鬼ごっこや色、物鬼)』等々。

更に年長さんが行っていた遊びを年中さんがするようにしました。『戦いごっこ』を行っている中心は年長さんで、年中さんは一、二名で、ルール等はあまり知らないはずなのに、年中さんだけでも同じように遊びが成立しているのには驚きます。保育者が説明しなくても、遊び方は自然と伝わるものなのです。

上段の続きです。いつもは年長さんのグループに朝一で声を掛けられて『サッカー』や『戦いごっこ』をしていたのですが、この頃年長さんの男の子と女の子がグループ(勿論全員ではありません)で遊ぶようになったので年中さんに誘われるようになりました。その年中さんの数人が先生、戦いごっこしようよ!と言うので『いよ!』と言って一緒に遊ぶとやるほど!と思うことが。

5・4・3・・・!というスタートの合図の掛け声がまずそっくり、相手チームに切られた時に座ることや助けてもらったら生き返ることも、勝った時の喜び方までそっくりでした。この時のメンバーはちゃんと年長さんが遊んでいたのを砂遊びしながら、ブランコに乗りながら、他の先生と遊びながら見ていたのです。遊びの奥深さと子ども達の観察力に感心させられます。

独り言

小屋で飼っているうさぎを二学期になると園庭に出して更に関わりをもてるようにしています。(卒園児のお父さんが作ってくれた柵に放すのです)

初日は大勢の子ども達が柵に入って草をあげたり、抱っこして、うさぎの方がバテてしまいました。そのうちブームがさって落ち着いてくると今まで入らなかった子が中に入って草をあげたり、撫でたりする姿が見られるようになりました。

このような場面でも、子ども達の対応は様々で継続することが見えてきます。ある日うさぎが立ち上がると「風太だ!」と言っている子もいました。「おもしろい」柿原 勝

ふぞくの チョコレート工場！！

ふぞく新聞

10月3日(月)

Vol. 9
(Vol.51)

今大人気の映画と関係があるのか、ないのかわかりませんが、最近幼稚園で大人気の遊びが「チョコレート作り」なのです。

ペットボトルに水を汲み、それを土手(幼稚園の土手の土質はとてもきめ細かく水をかけると「チョコレートのような感じになる」)の上の方からどンドン流し、下の方が「チョコレート工場」になります。工場では、木の棒にその砂をつけて「はい、チョコレートポッキーです」と僕に試食させてくれます。「これは甘くておいしいですね」と言っています。「うちのチョコは「コーヒーマイルド」です」とか「後ろはホワイトチョコです」と言っている遊びを楽しんでいるのです。

この「チョコレート工場」の社訓は「なりきる」です。これこそが「こ」遊びの醍醐味です。

上段の遊びは、水を大量に使うところも魅力です。坂の上から大量に水を流した後、の様子をととても興味深くみている子ども達です。

さらに泥の感触も気持ちいいですね。え、汚い！」と思っているのはどちらかというと大人の方で、お尻が泥だらけになろうが、靴が泥だらけになろうがお構いなしです。

ふぞく幼稚園のお母さま方にはいつも大変な思いをさせていますが、子ども達はその中で色々な物を目で見て、肌で感じ、感覚を研ぎ澄ませていくのです。

そして何よりも想像力を膨らませて楽しんでいます。

何気ない遊びですが、これらの遊びこそがとても大切だと、チョコレート工場の試食係である僕は思うのでした。ちなみに、気温が下がると工場は一時閉鎖します。

独り言

チョコレート工場の近くには焼肉屋さんがいっぱいあります。焼肉屋さんといっても大きな古タイルを鉄板に見立てて、その上に草や枝や砂や石等をのせて遊んでいるのですが、そこには水をかけている子がいました。他の子は「水をかけないで」と怒っています。「火が消えちゃう」と言っているのです。僕に助けを求めてきたので「もしかしたら、あれは水じゃなくて油かも？」と答えると「え、油？」「熱くしてくれているのかも」と言うのと「そうかあ、でも油ももついたらいい」というので「タレかも？」と言うと「えー、タレは皿だよ」とずっと会話が続けるのです。こ遊びは本当に奥深い。柿

この時期だからこそ 入園の頃を思い出して！！

ふぞく新聞

10月14日(金)

Vol. 10
(Vol.52)

十月になりました。つまり半分が経過したので
す。四月に入園した子ども達の活動は確実に広
がっています。進級した子ども達の遊びは更に深
まっています。

バスの中で普通に話し掛けてくる年少さん、五
月の頃は固まっていたこと、黙って見ていたこと、
『おはよう』と声を掛けても無反応だったこと、
手を差し伸べたら表情を引きつらせていたこと、
これらを決して忘れていません。

どんどん活発になってくると、色々な事が出来
るようになると、ついついそれが『習たり前』にな
ってしまうのがこの時期です。

こんな時こそ、入園の頃を思い出して『あの頃
は○○だったのに・・・今は凄いなあ！』と『習
たり前』を誉めて認めて欲しいと思うのです。

上段の『習たり前』という言葉には落とし
穴があると思っています。それはこの幼児教
育の分野では特に感じます。

個性』個人差』ということを意識しながら
子ども達と接していくと『習たり前』とい
うのはほとんどありません。(勿論『こで言
いたい』とは何でもありますよ』等というこ
とではありません) 似たような言葉に『習
通』というのがあります。子ども達にとって
『習通』ほどややこしい基準はないと個人的
に思っています。

大多数の子と違うことをしたら、その子
は『×』なのでしょうか?』みんな似たよ
うなロボットのような人間になって欲し
いのでしょうか?』とこんなことを考えてい
るとある大切なことに気がきます。他人と
の比較ではなく、まずは本人の変化(成長)
を大切に!』という事に。

独り言

最近子ども達が
「先生、野球やろ
うよ!」と誘って
くるようになりました。
つい最近ま
で夢中になってサ
ッカーをしていた
のに:~と思っ
ても達と始めると
「え!」と思うこ
とがありました。
北海道日本ハム
ファイターズの選
手の名前が次々に
出てくるのです。
「先生、俺小笠原
ね」と言ってるバツ
ターボックスに立
つと構え方までよ
く似ているので
す。ボールを投げ
ると思っていた以
上に多くの子が上
手に打つのです。
ただ改めて野球
のルールが難しい
ことを知らされま
す。まあ今は打っ
て、走って、楽し
んでを第一に行っ
ています。ちなみ
にサッカーも野球
と交互に楽しんで
います。柿原 勝

ふぞく新聞

10月28日(金)

Vol. 11
(Vol.53)

「先生、きたよ、きたよ！！」 「シー！！じっとしてよう」

子ども達の遊びの中で、昔から人気のある遊びの一つが「かくれんぼ」です。

どちらかというと走り回る「鬼ごっこ」等に誘われることが多いのですが、今回は**先生、一緒にかくれよう！**と誘われて隠れることに……。

かくれんぼの醍醐味は、鬼の声が近づいて来た時のドキドキ感と、近くまで来たけど見つからなかった時のワクワク感（ホッ）と感です。

狭い所や、まさか！と思うところに一人で隠れていると確かに見つかりにくく、そのような場所を選んで隠れる子もいます。

逆に**先生、一緒のところ！**と大勢で隠れる子達もいます。この大勢で隠れている時に「ソコソと内緒話をするのもまた楽しいようです。

楽しみ方もそれぞれで、それも良いですね。

かくれんぼを何度も何度もした後、女の子数人が**先生、今度はお母さんごっこしようよ**と誘ってきたので「よし、やろう」とま

まごと「コーナーに入ってそれぞれ役を決めることに……。この時の配役には『流行』を感じ

しました。まず多くの女の子はお姉ちゃんや

お母さんを希望していました。僕は子ども

達から**先生はお父さん**と決められていま

した。数年前は「こで**私、犬**」とか**バブちゃん**

ん」と言う子がいたのですが、なんと**私、カ**

フト虫」と言ってかこの中に入っていくので

す。更に二人の男の子も**ヘラクレス**」と言っ

てカフト虫になりきっています。それにのっ

てはい、はちみつ」と言うと言と食べる真似を

しています。

更にこのカフト虫が、途中家から逃げ出し

て、家族みんなで捕まえる遊びへと発展して

いったのには大笑いしてしまいました。

独り言

学芸会の季節です。全部ではないのですが、多くの卒園児が通う二校の小学校にお邪魔して見学させてもらいました。

幼稚園時代を思い出しながら見ていると「ホンマに大きくなつたなあ」とか「幼稚園の時は恥ずかしがつて、しなかったのに……」等々子ども達の成長を嬉しく思います。

その学芸会の中で、とても大切な声を卒園児から聞くことが出来ました。その子は、劇を終えてクラスに着替えに戻る際「**あーおもしろかった**」と言いながら歩いていたので『発表しながら楽しめるなんて』とても素晴らしいことです。実は、それがとても大切なことなのです。

柿原 勝

ふぞく新聞

11月11日(金)

Vol. 12
(Vol.54)

好きこそ物の上手なれ！！

諺(ことわざ)って本当に奥深いなあと感じます。誰が考え出したのか、言い出したのかそのあたりはともかく、子ども達が夢中になっている姿を見ているとタイトルの諺が浮かびます。

オルガンを毎朝弾いている子、縄跳びを毎日している子、お遊戯をステージで何度も踊っている子、ブランコにのって毎日遊んでいる子、絵を自由画帳にたくさん描いてもう二冊目に突入している子等々。

これらの子ども達に **先生、教えて！** **先生、音楽かけて**と頼まれることはあっても、**〇〇しなさい**と言ったことは間違いなくありません。自ずと始める姿勢、そして向上していくことへの喜び、それが継続へと繋がっていくのです。ここに大きなヒントがあると思うのです。

子ども達へのアプローチの際に、個人的にとっても大切にしていることがあります。(昔はそれが中々出来ず、悪循環になっていたとも知らず……)

それは何かと言つと、子ども達がやりたいことを自分達で決められるように心掛けることです。無理やりやらされた「先生に言われたから仕方なくする」という感じにならないように気をつけることです。

勿論全部が全部そんなことは無理でしょう。特に家庭での日々の中でそれを意識し過ぎると何も出来なくなってしまうかもしれません。でもこの事を意識しておくことはとても重要なのです。

上記の諺にもあるように自ずと始めるというこのスタート地点がとても大切なのです。人間誰だって自分で決めたいという気持ちが強くあるのです。

独り言

上段の話の補足をここに……

大人達だって言い分はありますよね。僕だって同じようにあります。「子ども達に自分で決めさせたよ。でもその後余計大変になった」という言い分が！

でも子ども達にも言い分があるのです。「普段は決めたせてくれないのに、一度や二度、上手くないからって、それで判断するのはズルイ」という言い分が。

子ども達にとって大切なことは、普段から大なり小なり、選択をさせていくことです。そしてそれに対して批判をするのではなく、失敗等に対して安心感(保障)を持たせていくということだと思います。『頭の片隅に』と願う保育者です。 柿原 勝

子どもの頃の自分！！

ふぞく新聞

11月28日(月)

Vol. 13
(Vol.55)

「この仕事をさせてもらったおかげで、子どもの頃の自分を思い出すことがあります。」

僕が幼稚園時代にとっていた行動を今回は書きたいと思います。それらは大人(勿論保育者を含む)からしてみたら「え?何?どっちでもいいじゃないの?」というのがたくさんあります。

帰りのバスに乗る時に、一番最初に乗りたい。

お弁当は一番に食べ終わりたい。数が少ないものをゲットしたい。(当時は数が少なかった、黒色のブロック)トイレの際は混んでいても扉の色や同じ場所と決めていた。水飲み場の位置も石けんの色で決めていた。(空いている場所があっても使わずに並ぶのです)等々。

だから子ども達が今幼稚園でとっている行動は「ん、わかる!」と共感しています。

上段で偉そうに言っていますが、この仕事に携わったおかげで思い出すことが出来ただけなのです。言い換えるとその仕事に就かなければ、どっちでもいいだろう!」とか「ばやくしなさい、待ってるんだから」と間違ひなく言っているでしょう。

共感出来るということは、相手の気持ちが分かるので、怒ったりは決してしません。掛ける言葉も自然と柔らかくなります。すると子ども達の反応も変わってきます。良い循環が生まれてきます。「こに」子どもとの関わりのヒントがあるように最近感じています。

色々と難しい育児書を読むよりも、自分の父母に「子どもの頃どんな性格だったか?」「子どもの頃どんな行動をとっていたか?」を聞くことが先かなあ...と思っています。縦の繋がり(世代交流)は大事です。

独り言

お遊戯会が終わりました。お遊戯会が終わるとそこで「おしまい!」ではなく、そこからさらにふぞくのお遊戯会が始まる。いつても過言ではありません。

色々な曲に合わせ色々な曲に合わせる園児が(勿論男の子、女の子問わず)ステージ上やステージ下で踊っています。

僕はこの姿がとても好きで、一緒に踊ったり、音楽をかけたらしめます。でも今回は今までにない声がある園児からあがったのには驚きました。いや驚き以上に嬉しく思いました。というのは、運動会の時にした体操の曲「ガガンバーかけて!」と担任の先生に頼んでいるのです。これもなんか良いですよ! 柿原 勝

ふぞく新聞

12月9日(金)

Vol. 14
(Vol.56)

サンタからの手紙

子ども達が楽しみにしているクリスマスが近づいてきました。この時期になると子ども達からサンタさんに〇〇をたのむんだあとかサンタさんもうすぐ来るかなあ?という声がよく聞かれます。

年長組ではいつもプレゼントをくれるサンタさんに、逆にケーキのプレゼントをしようということとで、グループに分かれて三つのケーキ(紙や綿や毛糸です)を作りました。その際にサンタさんに手紙を書いている子もいました。

更にみんなで協力してサンタクロスやトナカイやクリスマスツリーの壁面を作りました。

その翌日です。壁面のサンタさんのベルトあたりに一枚の白い紙がはさまっています。何だこりゃ?」そこにはサンタさんからの返事が……。

手紙の書き出しのきりんぐみのみんなへ」という一文を代表の子が読みました。その瞬間、キーン、また来た!」何故、又かというのと、以前絵本のきょうはなんのひ」福音館書店」をもとに手紙を探していく遊びをしたことがあり、その時と状況が似ていたからです。ちなみにその時はサンタからではなく、幼稚園の主からの手紙という設定になっていました」とクラスが騒然としました。

手紙の内容は、サンタさんからケーキのお礼とお願いが書いてありました。『三つのお遊戯を見せて欲しいこと』、『赤い色の物を二十一個見つけて欲しいこと』でした。子ども達はいつも以上にノリノリに踊り、どんどん赤い物を見つけて、『これじゃだめだ』とか『こつした方がいい』と意見を言い合いながらその世界を楽しんでいました。

独り言

この遊びの最後に、サンタさんから三つの遊戯を見せてくれたこと、赤い物を二十一個も見つけてくれたことへのお礼として赤いお菓子(かっぱえびせん)のプレゼントがありました。このお菓子が本当に必要かどうかはさておき、子ども達がお菓子を食べながら色々と話している内容がとても印象的でした。

やっぱりサンタさんって良いんだよねあ!」とかサンタさんって幼稚園の主とてなよなあ」とか外に向かってサンタさんありがとうとお礼を言っているのです。

更にお弁当の後、外で遊んでいる子がサンタの足跡みつけたぞ!」の反応には素晴らしいと言葉を失いました。 柿原 勝

ふぞく新聞

1月27日(金)

Vol. 15
(Vol.57)

おや？今までと違うぞ！

三学期が始まりました。子ども達の姿にも変化が見られます。長期休暇明けはいつもその変化に感心させられます。

年長さんの数人と色々な場面で話をしていると「もうみんな小学生みたい」と思うことが多々あります。

先生のお母さんは何才？「六十四才だよ」
えーうちのお母さんは〇〇才だよ「名前は何て言うの？」「まりこ」「ふーん、じゃあ何処に住んでるの？」「遠く」「遠くにいたら寂しくないの？」「お正月に会ったからね」「そうなんだ」
先生の住所は？「愛国」「そこって遠い？」「歩くところちょっと遠いかなあ？」「ひゃあジャス」
とどちが遠い？「ジャスコよりは近いよ」「そうか」と色々な反応があるのです。

僕自身振り返ってみると、ちょうどこの年齢頃から『平支』『血液型』『交母のおじいちゃんとおばあちゃん』等々に興味を持ち始めたように思います。

物事の繋がりが分かってくると、今度は他の人の事も聞いて見たくなるのです。そして自分の中で『他の人も似ているなあ』等と再認識して身につけていくのでしょう。

休み明けの変化は勿論年長さんだけではなくありません。十名近くの年中さんと『メ鬼』をして遊んでいる時にも見られました。

この遊びは若干ルールがややこしいのですが、年長さんが好きな遊びで以前から年中さんも交ざって遊んでいました。でも今回様子を良く見てみると、ルールや流れやポイントを理解した上で、楽しんでいるのが分かりました。その姿に『もうすぐ進級かなあ』と思うのでした。

独り言

大人にとっては面倒な、大変な雪かもしれないですが、今年は昨年度よりも雪があつて園庭や緑ヶ岡学園の坂（幼稚園ゲレンデと名付けています）でそり滑りを満喫しています。

何度も滑っていると、滑り方にも変化が見られ、そこにも個性を感じます。ボブスレーの選手のように滑り落ちてくる子もいれば、僕の背中を途中まで押して最後にしがみついて三人滑りを楽しんでいる子もいます。

「危ないと言えば危ないのかもしれないが、子ども達なりに色々遠くまで滑る方法を編み出しているのも分かります。」僕はここを大切にしたいと思うのです。
柿原 勝

遊んで遊んで遊び続けて 実感出来ること！！

ふぞく新聞

2月10日(金)

Vol. 16
(Vol.58)

「この時期は何かと**先生、学園行こう！**」と子ども達から誘われます。(学園とは、以前紹介した幼稚園のゲレンデのことです。)

玄関に置いてあるそりの中から一台選び、(その際の選び方も個性的で面白く、新品のそりを選ぶ子、好きな色のそりを選ぶ子、以前滑った時に上手く滑れたそりをじっくり探して選ぶ子等々)そのそりを引きずってゲレンデまで歩いていきます。

「この距離がなかなか厄介で、年少さんは途中から**先生!**」と甘えた声を出して僕に引っ張ってもらおうとする子もいます。なんとかゲレンデまでつけば、そこからは**ヤッホー!**とどんどん滑っていきます。

「この遊びを毎日続けていくとあること...」。

最初の頃は、ただ滑るだけでも十分楽しいようで、ただ登っては滑り、登っては滑りを繰り返していました。

第二段階は、遠くまで滑れるように色々工夫しています。足を上にあげる子、正座する子、そりの紐をあえて持たずに丸めて中に入れて滑っている子、寝転がって体重移動を巧みに行っている子、後ろ向きで滑る子等々。

第三段階は、そのかなり後で見られました。みんなそれなりに遠くに、速く滑れるようになっていきます。するとある年長児が**先生、バトルしよ!**と言って五人同時に滑ってスピードを競うのです。

そのすぐ後が第四段階で、**一位が3ポイント、二位が2ポイント...**となり、まるでオリンピック競技のようです。その時の子ども達の姿はもはやアスリートです。

独り言

この遊びの段階を見ていて気付いたことがあります。た。(本来ならば、もつとはやく気付かなくてはいけないかったことなのですが...)

保育者が子ども達の遊びにアドバースすることや、遊びに新たなトッピングを加えることは確かに大事です。でもそれ以上に大切なことは、『子ども達が今、この遊びを通して何を感じているのか』、『この遊びをどの程度自分のもの(＝実感)にしているか』をよく把握することなのです。

ついつい大人は、アドバースをしているつもりで色々子ども達に言いますが、この把握(＝よく見る)が出来ていなくて浸透しないのです。

柿原 勝

ふぞく新聞

2月24日(金)

Vol. 17
(Vol.59)

大切な通い道！！

今までとっても仲良しだったお友達が色々な場面であつかり合っているのを最近よく見かけます。表面的な部分だけをみると「え？どうしたの？」なんて？今まで仲良く遊んでいたのに・・・」と思うかもしれませんが、僕はそうは思っていません。

『どうとうここまで大きくなったんだあ！』とか、成長の通い道を今まさに通っているんだなあ！』と逆に嬉しく思うのです。

人間同士きれいなことだけでは上手くいきません。やはり衝突から、喧嘩から学ぶこともたくさんあるのです。

経験をしてきた(ある意味答えを知っている気になっている)大人はついつい近道をさせがちですが、ここを通ることが大切なのです。

大人はどうして近道をさせがちなのでしょうか？(偉そうに言っていますが、僕もその一人です)それはズバリ、子ども達のことをとても大事に思っているからですね。

自分達が嫌だったこと、困ったこと、苦しかったことを子ども達には経験させたくないという気持ちが働いているように思うのです。

でも、それらの経験も大切な通い道だということなんです。前回のふぞく新聞で書いた「実感すること」とここは密接な関係があります。自分で通らなければ、やはり実感は出来ないのです。

子ども達も今までに経験したことのない状況になることで、葛藤を繰り返します。そ

こで大人はすぐに答えてあげることが出来ず困惑します。でも大人もここを通ることが成長していくのです。

独り言

子どもと一緒に過ごすことで、大人も成長するので、子育てってそういう意味で素晴らしいです。

子どもをきちんと育てることのみが子育てならば、誰だって嫌になっちゃいます。プレッシャーに押しつぶされちゃいます。大切なのは、自分も育つということだと思ふのです。

まだまだ経験不足、勉強不足ですが、多くの子ども達に色々なことを教わりました。教わっては失敗し、教わっては間違えての連続ですが今まで以上に幼児教育の奥深さに魅せられています。

次回(最終回)は今、最も尊敬する先生から教わったことについて書きたいと思います。

柿原 勝

ふぞく新聞

3月10日(金)

Vol. 18
(Vol.60)

良いところ探しの 旅に出よう！！

ふぞく幼稚園は明日が第四十一回卒園式です。子ども達と色々な遊びをしたなあ、色々なことを話したなあ、色々な物をみつけたなあ、そして子ども達から今年も大切なことを教わったなあと思っています。

そのきっかけを深めて下さったのが、現在北海道教育大学釧路校の二宮先生でした。先生は僕が「？」と思っていることをとても分かりやすく教えてくれます。現在最も尊敬する先生の一人です。

その先生が『NOBODY'S PERFECT』だよ。
(「誰も完璧ではない」みんなやっていこう)と教えて下さいました。お父さん・お母さん方にもこの気持ちを伝えていこうと思いました。この考えは子ども達にもあてはまります。

子ども達は個性豊かです。誰一人として同じじゃありません。得意なこと、苦手なこと、好きなこと、嫌いなことと様々です。でもそれで良いのです。いやそれが良いのです。(自然です)

だからこそ、その子、その子達の良いところ探しの旅に出ることにしたのです。

欠点やあら探しはもう止めて、まず子ども達の様子をよく見てからあ、ホンマにエエわあー!というところをみんなに知らせていくのです。

ありとあらゆる場面でもよく見るとあ、今座り方が良いのは〇〇君、鼻血が出て困っている子にとっても自然に近づいて

じょうぶ?」と声を掛けている△△ちゃんは

素敵だ」と良いところが山ほどあるのです。

そしてその言葉にみんなも更に変わっていくのです。

独り言

完璧を求めて、非の部分否定しているうちは大きな前進は無いように思っています。

非の部分も認めつつ、そこを指摘するのではなく、その人の良いところを探し、そして認め、誉める。この繰り返しがとても大切だと感じています。

今子ども達はなかなか難しい環境にいます。ありのままを(良いも悪いも含めた)受け入れてもらいたくてもそうはいかない環境です。何か出来ないか認めてもらえないような感じを持っています。(条件付の愛情じゃ誰だって辛いですよね。)

ありのままを受け入れてもらえる安心感が土台となり色々なことに繋がると信じています。 柿原 勝